

その日はちょうど寒さが落ち着いてきた頃で、家に帰るのは面倒で。街をフラついていたら、世話になった先輩たちとすれ違って、誘われるまま公園でたむろしていた。相変わらず煙草は不味いし、酒を煽れば頭がガンガン揺れて気持ち悪い。それでも、先輩たちから聞く『ちょっとワルい話』は面白くて、時間も気にせず馬鹿みたいに騒ぎ通した。

近所の誰かが、馬鹿騒ぎを通報したのだろう。

公園の入り口から警官が二人、近づいてくるのが見えた。補導されたら面倒なのは分かっていたし、人数も多かったから、運の悪い誰かが犠牲になってくれ、と一斉に散り散りになった。

酩酊する視界で公園を飛び出て、しばらく。

パッと視界が明るくなって、ドッと耳をつんざく衝撃音がして、体が軽くなって、重くなって、次の瞬間にはコンクリートを見ていた。

そこからの記憶は無い。

その瞬間に、きっと俺は、——死んだのだろう。

次に目が覚めたとき、俺は異世界で聖女になっていた。

部屋をノックされる。返事をせずとも、デカイ扉はゆっくりと開いて、三人のメイドが入ってきた。

「おはようございます、レイヤ様」

「お支度を始めますわね」

敬う口ぶりのわりに、俺に選択権を与えない。メイドたちはいそいそと寝台に近づいてきて、俺をベッド脇に腰掛けさせ、ネグリジェを脱がせてきた。それから清めた濡れ布で全身を拭われ始める。

俺をいくつだと思っているのか。

一年前、初めてメイドたちが部屋へ押し入ってきたときは、暴力も辞さない気持ちで抵抗したのだが、俺が世話をさせなければメイドたちがうんと手酷い折檻を食らうと説得され、今に至る。

別にメイドたちはどうでもいいが、年下にも見える彼女たちが自分のせいで折檻を食らうのは気分が良いものでもない。

「相変わらずレイヤ様の御髪はお綺麗ですね」

柔らかい毛先のブラシが髪を梳く。

ここに来る前。生前、前世とでも言うのだろうか。

とにかく昔は、濃い茶色の髪をブリーチして、ブロンドに染めていた。しかしこの世界に来てからは、地毛がブロンドらしい。どれだけ日が経っても、根元から濃い茶色の髪が生えてこないのだ。

うなじのあたりで髪を一束にまとめられる。

ネグリジェから純白のワンピースに着せ替えられた。

「今日の儀式のためにと、新しく作らせたんですよ。お似合いです」

お似合いって。

そんなわけがなかろうて。

純白のワンピースだ。裾にレースが施されている。俺には価値が分からないが、聖女が身に纏う物はすべて一級品でなければならぬらしいから、このワンピースだって職人が手がけた凄い物なのだろう。

しかしワンピースなのだ。俺は背が高いし、小柄でもない。胸板だって、前世の基準ならあるほうだ。腕も太い。足もデカイ。そんな男に着せたなら、どうしたって至って普通の女装なのだ。ワンピースが似合うわけがない。

それなのに、この世界のイカれた人間たちは、俺に女装させて『お綺麗ですね』とほざくのである。一年経ってもその薄気味悪さには慣れることができない。

お綺麗なわけがあるか。悲しいかな、俺は前世でもこの世界でも、顔面偏差値には恵まれていないのである。

「今日はアルバート様が、お迎えにいらっしゃるようですよ」
「げ、アイツ来んのかよ」

いけすかない胡散臭い笑顔が脳裏によぎり、げんなりした。メイドはアイツ呼ばわりを気にする様子もなく、淡々と続ける。

「早めに朝食といたしましょうか」

聖女の食事は質素で不味い。素材は良いらしいが、なんせ味付けが素材頼りだ。月に一度の『儀式』を迎えるまでの三日間は特に。素材頼りというか、素材が出される。酒も煙草も無い……というか、俺には与えられないから、いつだって口元が物寂しい。

さして満足感の無い飯が腹を満たした頃、屋敷が騒がしくなる。

この屋敷は王城の敷地の外れにあって、来客はほとんど無

い。メイドをはじめとする使用人たちも屋敷住まいである。
だというのに玄関側が騒がしいとなればつまり。

「お目覚めはいかがですか、聖女レイヤ」

聖騎士アルバートの登場である。

「最悪」

べ、と舌を突き出せば、アルバートは余裕の笑みでくつつ笑った。

「いつも通り聖堂で会えばいいだろうが」

「たまには屋敷でのお顔も拝見したくて」

「いちいちきっしょいんだよ」

俺がなんと言おうが、気にする様子が無いのがまた腹立たしい。

アルバートは聖女を護衛する騎士団の隊長であり、聖女の『儀式』に必要な『聖騎士』の称号を与えられている。

「さて、行きましょうか」

まるでレディをエスコートするみたいに手を差し出される。
言わずもがな、俺はこの男がかなり嫌いだ。

アルバートってヤツは、頭が良ければ顔も良くて、喧嘩も強い。聖女の護衛はかなりの精鋭騎士にしか務まらないらしいのだが、アルバートはそのてっぺんにいるわけだ。立場がある。おまけに騎士の服はカッコいい。血で汚さぬことを誓う純白のジャケットが、アルバートの黒髪を美しく際立たせていた。

かたや俺は、パツパツのワンピースである。本当に許せない。俺だってカッコいい服が着たい。

こんな、女が見る絵本の中の王子様を具現化してみたいな男に護られたくもない。

何度でも言おう。

つまり俺は、アルバートが本当に嫌いなのである。

屋敷を出て、馬車に乗り、城の敷地を出て、儀式を執り行う聖堂の入り口までやってきた。

国で一番聖力が集う場所に建てられているらしい。聖女と言われている俺だが、その聖力とやらは感知できない体質なので、未だに馬鹿げたでたらめだと思っている。

馬車を降りて、アルバートに手を引かれながら聖堂に入る。

嚴重な結界が張られているらしく、ひとたび扉を閉めれば、俺たちの声は見張りにも届かない。

「さて、始めましょうか」

聖堂には天井が無い。高い壁が四方を囲んでいるから外から見られることもないのだが、青空の下で服を脱ぐのにはまだ抵抗がある。

アルバートが背中の中のボタンを手早く外した。慣れた手つきに気持ち悪さを感じながらも、黙って袖から腕を抜く。そのままストーンとワンピースを落とせば、無防備な四肢がアルバートに晒されることになった。

体を、特に、前世とすっかり様子が変わってしまった下半身を隠したいが、変に恥ずかしがるのも逆に恥ずかしい気がする。

「すっかり慣れましたね」

「慣れるわけねえだろ。やんねえとオメーがイカれたことすっから仕方なくやってんの」

「おやまあ」

この儀式が嫌で嫌で、逃げようとしたときのことは思い出したくもない。あんな目に遭うなら、と渋々応じているだけである。勘違いするな。

アルバートは相変わらず胡散臭くニコニコ笑っていた。俺を全裸にしておいて、自分はジャケットや装飾品だけを外し、シャツやパンツは履いたままである。

差し出された手を嫌々握って、聖堂の奥へと進んだ。

まずは手前の浴槽から。薄桃色の湯が溜まった浴槽で、儀式のために体の準備をさせられるのだ。

これに浸かれば、俺はもう俺じゃなくなってしまう。先月までのことを思い出し、つい深く息を吐き出した。それから意を決してぬるま湯に足を入れる。座るために用意された段差に尻を着けた。

「湯加減はどうですか？」

「どうもしない」

「もう少し俺に気を許してくれても良くないですか？」

「許さない」

「手厳しいなあ」

袖を捲ったアルバートの手が湯船に入ってきた。

その手は躊躇いもなく、俺の下半身に伸びてくる。

今月も、また始まってしまったのだ。

「足、開いてください」

早く終わらせるためだ。

言われた通りに足を開く。薄桃色の湯の向こうに、前世ではあったはずのイチモツはもう存在しなかった。代わりに、俺の体には今、女性器がついている。

「っ、あ♡」

きゅむ、と柔くクリトリスを摘ままれた。

「んッ……、ふ……っ、んっ、う……ッ」

透明な液を塗りつけるように、根元から丁寧に擦られる。二本の指が突起を挟んで、恥肉をぐうっと上に引っ張られた。皮に隠れた蕾が簡単に覗き出す。

「んんっ……♡」

俺をこの世界に送ったのが神様なら、ソイツはきっととことん俺が嫌いだったのだろう。立派だったちんぽを取り上げられて、代わりにこんな物を与えやがった。

アルバートの指が優しくクリトリスの先端を撫でつける。

「う、あ、んう♡」

ぞわりと快樂が背中を駆け巡って、思わず足が浮いた。ぬるま湯が揺れて、ぱしゃりと浴槽からこぼれ落ちる。

「随分と敏感になりましたね」

「うる、さっ……いっ♡」

俺は男だ。この世界にやってきたときも、召喚陣の中に突然現れた俺を見てみんながっかりしていた。

そのくせ、逃げだそうとする俺をとっ捕まえて、念のたもとひん剥いて、俺の下半身を見て「儀式は成功したんだ！聖女様だ！」と、俺を聖女に仕立て上げたのだ。

指先がとん、とん、と優しくクリトリスを叩いてくる。

「あ、あ、あっ♡ んう……っ、く、……うう……♡」

「いつ聞いてもかわいい声」

「かわい、く、ないっ……、んううッ♡」

アルバートだけじゃない。俺はこの世界の全部が嫌いだ。幸せなんて訪れなければいい。国ごと滅んじまえばいい。そう思うのに、嘘じゃないのに。

クリトリスを叩かれる速度が上がっていく。口元を両手で押さえても、漏れ出る声を我慢できなかった。